

特別陳列 メイジ・スタイル

ー石川から世界へー 【近現代工芸】



銅器会社《金銀象嵌花鳥人物文薄端》
ー「メイジ・スタイル」よりー

■ 婚礼調度と遊戯具【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 千代女と加賀の俳人たち【古美術】

■ 書にみる文字の造形【近現代書】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 12月の企画展示室
- 企画展Topics
- ミュージアムレポート
- 学芸室の人々
- 12月の行事予定

特別陳列 メイジ・スタイル —石川から世界へ—

12月17日(土)～2月5日(日) 会期中無休

学芸員の眼

「ジャパンクタニ」の代表、九谷庄三の《色絵金彩八仙花鳥図大花瓶》をみていきましょう。庄三は江戸時代後半から明治初年に活躍した陶工で、「彩色金欄手」技法と赤絵を用いた「庄三風」を確立させ、輸出九谷の主流となる製品をつくりました。本作には二つの窓それぞれに八仙と花鳥が緻密で色彩豊かに描かれています。八仙は日本でいう七福神のようなもので、華人社会ではとても人気のモチーフです。輸出九谷には、本作のようなアジア的な画題が描かれ、世界で高く評価されてきました。



九谷庄三《色絵金彩八仙花鳥図大花瓶》

明治維新は政治、社会や生活などに激変をもたらしました。石川県では江戸時代以来、高い水準で工芸品が盛んにつくられてきましたが、明治維新のあおりを受け、旧来のパトロンである武士階層がいなくなると、職人達は窮地に立たされました。しかし、明治五（一八七二）年、兼六園内で開催された金沢博覧会を皮切りに、金沢区方勸業場（のちの石川勸業場）、金沢工業学校（のちの石川県立工業高等学校）など、工芸（工業）を保護育成する機関の設置や、金沢銅器会社や九谷陶器会社などを中心とする工芸を国内外に販売する企業の設立など、国策としての殖産興業の動きに敏感に反応します。その結果、藩政期以来の

工芸品の保護、育成、継承、発展に努めた結果、後にく工芸作家を輩出するに至ります。

その中でも、寺井町（現・能美市）の九谷庄三が確立した「彩色金欄手」の上絵技法を用いたやきものが欧米諸国へ輸出されると高い評価を受け、「ジャパンクタニ」と呼ばれるようになり、輸出陶磁器の中心となります。

本展では、明治時代に石川県から輸出された工芸作品が、輸出工芸の主流となっていたことに着目します。明治の輸出工芸の様式、すなわち「メイジ・スタイル」として、制作されていく工芸作品を、図案や作品から再考するものです。



九谷庄三《色絵金彩花鳥文大香炉》

古美術(第2展示室)

千代女と加賀の俳人たち

12月17日(土)～2月5日(日) 会期中無休

松尾芭蕉は、有名な「奥の細道」の行脚(一六八九)の帰路に加賀へ立ち寄り、俳人たちと交流したことから、加賀では蕉風(芭蕉を祖とする俳諧の流派)が興り、その没後も芭蕉を慕う俳人が生まれました。本特集では、加賀の千代女をはじめとした加賀の俳人たちが記した「俳画」を紹介します。

「俳画」とは、俳句に添えて描かれた絵画のことですが、即興ながらも機知に富み、滑稽味に溢れていることが特徴です。それは単に俳句を絵画化したものではなく、ユーモアに満ちた俳諧の熟成とともに発展しました。優雅に洗練され、神前に奉納された連歌に対し、日常に即した道化の文芸である俳諧は、室町末期以降に栄え、江戸時代に入ると「画」と「俳」の双

方に秀でた人物が登場しました。

著名な俳人百人の肖像とその句を述べた『俳諧百一集』を著したのは、越中国の俳人康工です。明和二年(一七六五)に京都で刊行されベストセラーとなった本書には、北枝・万子・秋之坊・千代尼(女)・珈涼・麦水・希因など、加賀の俳人も多く紹介されています。

その後、これら百人の俳人の姿と句を、絵画として仕上げたのが、加賀藩の御用絵師であった梅田九栄です。九栄は年風と名乗る俳人でもありました。ここには加賀の女性俳人として知られる千代女と珈涼の姿を向かい合うように描かれています。

本特集では、四季を詠んだ千代女の句に絵が添えられた『十二句貼交屏風』もあわせて紹介します。



《十二句貼交屏風》左隻 千代尼

前田育徳会尊經閣文庫分館

婚礼調度と遊戯具

12月17日(土)～2月5日(日) 会期中無休

今回は、溶姫の婚礼調度と香道具の中でも遊戯具を中心に展示します。

婚礼調度とは、婚礼の際に整えられる嫁入り道具であり、姫君や女中が日々の生活で使用する品々等を指します。本展では、第十一代將軍・徳川家斉の子女であり、加賀藩十三代藩主・前田斉泰に嫁いだ溶姫の婚礼調度をご紹介します。

文政十年(一八二七年)十一月二十七日、溶姫が江戸城から本郷の加賀藩邸へ移る「引き移り婚礼」が執り行われました。この際、使用された婚礼調度は一二四六点、長持だけで二百樟近くにも及ぶとされ、その一部が現在も前田育徳会に所蔵されています。今回はその内、拾貳手箱、厨子棚、源氏箱など計十四点を

展示します。

香は仏教の伝来とともに日本に伝えられ、主に仏事の供香として用いられました。平安時代になると薫物合かきものあわせといい、香りの優劣を競うようになり、室町時代には香道として体系化されました。今回出展する《桑十組盤》や《四種盤》は盤立物の一種です。盤上に置かれた駒を香の判別に応じて動かし、勝敗を競って遊びます。極めてゲーム的要素が強い聞香の一種で、江戸時代に流行しました。

このように、婚礼調度と遊戯具はどちらも日々の暮らしの中で使用されてきた作品です。当時の生活を身近に感じ取っていただければ幸いです。



《桑十組盤》より「聞鶏香」

優品選

12月17日(土)～2月5日(日) 会期中無休

日本画分野からは、雪を描いた優品を紹介します。石川義《雪韻》は、秋田杉を題材にした六曲一双の屏風です。音が雪に吸い取られたかのような、静寂を謳う優品です。西山英雄《阿蘇^{あそ}嵐》は、阿蘇山から吹く局地風を題材にしています。月明かりの中、阿蘇山頂に積もった雪を巻き上げる光景に自然の力を感じます。

油彩分野からは、高光一也《チュールリー公園にて》を紹介します。小さな白い帆船が浮かぶ噴水池の周りでくつろぐ人々、その奥にカール・ゼル凱旋門とルーブル美術館を描きます。チュールリー公園は、19世紀以来パリジャンの憩いの場でした。本作は高光の最後の出品作。パリを懐かしく思い出しながら描いたのでしょう。

彫刻分野からは、吉田三郎《北村西望像》を紹介します。北村西望は長崎県出身の彫刻家。吉田とは東京美術学校の同期で、卒業後も交友が続きました。北村によると、当時吉田は骨と筋肉、骨と皮といったものに興味があり、骨と筋肉がはつきり出ている自分の顔がモチーフになったのだろうと回想しています。

コートが必要な季節になってきました。版画部門からの脇田和の《外衣》をはじめとする洋服をテーマとした作品を紹介します。本作は、支持体の紙に対する絵の具の付き方そのものを、造形要素に組み込んで表現しています。版画技術各種の研鑽を積んだ脇田の、制作への追求心が表れた作品の数々をご覧ください。



吉田三郎《北村西望像》

書にみる文字の造形

12月17日(土)～2月5日(日) 会期中無休

明治以降の日本の近代化によって、西洋から入った新しい「美術」という捉え方のもと、絵画、彫刻など各ジャンルに固有の表現が追求され、書の表現にも変化をもたらしました。書は「書く」と「読む」とが対応する営みでしたが、近代に入り美術館や展覧会の制度の普及によって、絵画や彫刻と肩を並べ会場芸術だと捉えられるようになったのです。

そのため日常の生活空間と切り離され、文学などの距離と遠ざかった書は、「読む」ものから「見る」ものへと性質を変えていったのでした。それは書の紙面を西欧的な絵画空間と同じものとして捉え、その表現を文字の連なりとして見るというより、造形的な側面に注目するということです。たとえば、淡い墨

を使つて書く「淡墨」表現や、にじみやかすれを強調した表現、また、詩文ではなく、一文字から数文字を書く「少字数書」など、書表現の拡大となっていきました。特に戦後は、何をどのように書くか、という点において書き手の想いに一任され、毛筆の使用が伝統的な営みとなったことで、書を造形芸術に位置づけることが自然になったのです。

このように現代の書は、単に古典の再現に留まらない新しい美的造形を打ち立てるため、「形」「線」「墨色」そして、「余白」を生かしつつ、独自の美しさを確立してきました。今回の展示では文字の造形美に注目し、「文字のパフォーマンス」を通して書の魅力を感じ取って頂きたいと思います。



久田鶴南《暁雲》

12月の企画展示室

企画展Topics

かねは雄弁に語りき —石川県立美術館の金属コレクション—

1月4日(水)～2月5日(日) 会期中無休

美術館活動の核はコレクション(収蔵品)です。日本では多くのミュージアムがそれぞれのミッシェンのもとで作品を収集し活動を行っています。石川県立美術館のコレクションの特色は、幅広い分野・時代の作品を所蔵していることです。「石川ゆかり」をキーワードに、古美術・工芸・絵画・彫刻などを網羅する作品群が、一九五九年の開館以来、今日まで受け継がれています。

このたび、当館コレクションの魅力を発信する事業として本展を開催します。「金属」というテーマのもと、古美術から現代までの作品が一堂に会します。ふだんは時代や技法ごとに別々の展示室で紹介され

ている作品を同時に紹介する内容は、当館としては新たな試みとなります。「用途」「技巧」「素材」という3章構成で、音や重さ、超絶技巧など、様々な視点から金属の魅力に迫ります。冷たい、無機質などイメージされることも多い金属ですが、実は色彩豊かで様々な表情をみせる素材であることを体感いただけることでしょう。

本展は、金属の魅力を紹介するとともに、コレクションの魅力をこれまでとは異なる視点から発信する機会となります。当館コレクションを見慣れた方も、そうでない方も、新たな発見を楽しんでいただければ幸いです。



木戸修《スパイラル》84)

第7・8・9展示室 第33回 志賀町を描く美術展金沢展

12月8日(木)～11日(日) 会期中無休

志賀町を描く美術展は、志賀町の四季を通じて彩りを添える風景・豊かな自然の恩恵を受けて生まれてきた伝統文化や慣習などをキャンバスに描いていただくことにより、志賀町をより多くの皆様にPRする目的で開催しております。例年、招待作品から一般作品まで約一〇点の洋画・日本画・水墨画・水彩画などの作品を富来展と金沢展の二会場で展示しております。

◇入場無料

◇連絡先 志賀町生涯学習課

羽咋郡志賀町末吉千古1-1
0767-32-9350

ミュージアムレポート

みんなでたのしむ はじめてのうるし

令和4年8月9日(火)開催

昨年度までコレクション展示室では「夏休み親子で楽しむ美術館」と題して夏休みに美術館へ親子で来館されるきっかけとしての特集展示を準備しておりましたが、今回は、親子という冠を「みんなでたのしむ」に変更し、夏休みに美術館へ訪れる皆様へ向けて、普段の展示に、「ひとりでも楽しく家族でも楽しく作品鑑賞」という思いを加えての特集展示としました。テーマは「はじめての工芸」でした。伝統工芸について学び始めた小学生のお子さんや、実は工芸のことよく知らないけれどという大人の方に向けて、工程見本などとともにわかりやすく工芸をご紹介します展示内容でした。

本展示の関連イベントとして8月9日(火)に体験講座「はじめてのうるし」を開催しました。まずは展示室へ向かい「はじめての工芸」を学芸員の解説のもと鑑賞。その後、講義室にて、漆作家の名雪園代氏を講師に迎え、各自一枚小皿に消しゴムはんこの要領で、○△□を並べたりつなげたりして模様を施しました。今回は大人でも体験したいという声にお答えして、午前に親子を、午後におひとりまたはおふたりでの大人を対象とし、当日16組33名にご参加いただきました。名雪先生から漆についてお話を伺ったあと、先生の試作を参考に制作手順を確認した後、よいよ挑戦！どちらの回もみなさん思い思いのデザインを楽しみながら作品を完成させることができました。



ミュージアムレポート

令和4年度 学校出前講座

学校出前講座は、県内の学校で所蔵作品を展示し、本物の作品の魅力に触れてもらう取り組みで、平成十七年度よりスタートし、本年度で十八年目となります。

美術館へ足の運ぶ機会の少ない地域の学校を中心に、今年度は五校での開催となりました。十月から十一月にかけて白山市立河内小学校、小松瀬領特別支援学校、中能登町立鳥屋小学校、羽咋市立粟ノ保小学校、能美市立寺井小学校で、それぞれの学校の状況に合わせて講座を行い、八四二名の児童・生徒、教員、保護者の方々にご参加いただきました。展示をした作品は日本画、洋画、彫塑、工芸、浮世絵など合わせて十三点。鑑賞では作品からみつけたもの・感じた自分の思いなどを言葉で表現していく鑑賞法なので、ウォーミングアップにどきどきする・こまっているなどを探してみるアートゲームを行い、気負い無く鑑賞に臨めるようにしました。その後、一つの作品についてクラス全員で見・感想を出し合いながらみる対話型鑑賞を通して、個々に違う作品の見方への共感や、見ることの楽しさを感じることを中心に作品鑑賞を深めました。



学芸室の人々

紅葉がきれいな季節になりました。秋の山の雰囲気を感じようと、白山方面へ。登山はしませんでした。道の駅に行ってアイスを食べたり、引越してきたばかりの時に訪れた滝などに行ってみました。滝は、以前行ったときと違い、道が安全に整備されていました。滝の音、水の流れる音、虫の音：日常の疲れから解放されるような癒やされる場所でした。夕焼けと山、畑の雰囲気も素敵でした。

奈良 竜一（学芸第二課 学芸主任）

学芸室の人々

中澤 菜見子（普及課 学芸主任）

秋は好きな季節です。芸術の秋、食欲の秋、何をするにも気持ちがよく、過ごしやすいですね。唯一スポーツの秋だけは、私には縁遠いものと思ってしまうのですが、近年は家人の影響でバスケットボールなどをテレビで視聴するようになりました。特定のチームを応援するというわけではないのですが、わいわいしながらスポーツ観戦するというのも案外楽しいものだと感じています。まだ生でプロの試合を観たことがないので、機会があれば観戦してみたいと思っています。

12月の行事予定

■土曜講座

13時30分～15時 美術館講義室 無料

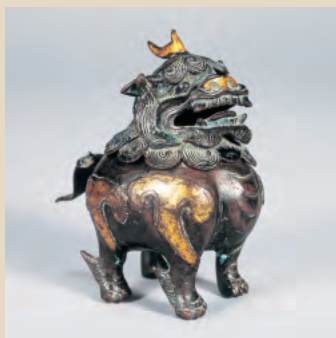
3日（土）	10日（土）
「コレクション展（近現代工芸）スライドトーク」 普及課担当課長 西 ゆづ子	「戦後の日本版画」 普及課長 深山 千尋

ご参加にあたってのお願い

- ① 来館時にサーマルカメラによる体温チェックを行います。
発熱等体調に不安がある方の参加はご遠慮ください。
- ② マスクの着用、手指消毒の徹底をお願いします。
- ③ 参加時は受付名簿に氏名と連絡先をご記載ください。
- ④ 会場内では会話を極力ご遠慮ください。

かねは雄弁に語りき ―石川県立美術館の金属コレクション― 企画展Topics

会期：令和5年1月4日(水)～2月5日(日)



《銅獅子香炉》
明（15～16世紀）



初代宮崎寒雉《段々釜》
江戸（17～18世紀）



高橋介州《双魚》
1958年



山田宗美《鉄打出鳩置物》
1909年
石川県指定文化財



末政哲夫《天窓の上の獅子座》
2005年（部分）



宗義《鉄自在蛇置物》
大正～昭和初期



蓮田修吾郎《白銅浮彫「豊穣なるライン」》
1983年

次の展覧会

令和4年12月17日(土)
～5年2月5日(日)
会期中無休

前田育徳会
尊経閣文庫分館

婚礼調度と遊戯具

第2展示室

千代女と
加賀の俳人たち

第5展示室

特別陳列
メイジ・スタイル
―石川から世界へ―
【近現代工芸】

第3・4・6展示室

優品選
【近現代絵画・彫刻】

第6展示室

書にみる
文字の造形
【近現代書】

1F企画展示室

かねは雄弁に語りき
―石川県立美術館の
金属コレクション―
【1/4～2/5】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
12月5日は第1月曜日より
コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

12月の休館日は
12日(月)～16日(金)
29日(木)～31日(土)

『石川県立美術館だより』に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員・石川県立美術館協力者・
県内各行政機関及び文化施設・全国の美術館・博物館へ

郵送配布！

2,500部発行

詳しくはお問い合わせください

株式会社ウィット Tel.072-668-3275

〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501

Fax.072-668-3276

株式会社ウィット 検索

HP.https://wi-t.co.jp/

WEBお問合せ
フォームはコチラ



広告

石川県立美術館だより
第470号(毎月発行)
2022年12月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。